

## 『法華玄義』の研究(三)

大野 栄 人

### はじめに

本論文は、『法華玄義』の「法華私記縁起」の「私序王」の部分  
を原典解明していくものである。

本研究は、平成十六年度春学期(四月～七月)の大学院文学研究  
科修士課程および博士課程の「演習」の授業の研究成果である。授  
業の受講生は、仏教学仏教史学専修の私のゼミ生のつぎの諸氏であ  
る。

伊藤智教(修士一年)、関晴介・トラン トウイカン(ベトナム)  
ム)・廣 賞佳(修士二年)、武藤明範・鈴木あゆみ・水野荘  
平・森 琢朗(博士二年)、久田静隆(博士三年)、伊藤光壽・  
濱口寛朗・今井勝子(研究生)、ギヤナ ラタナ スローモン  
(バンングラデシュ)(研究員)、當間日澄(聴講生)

授業は輪読形式で行ない、右記の大学院生諸氏が下調べをして発  
表してもらい、それを伊藤光壽氏が毎時間「書き下し文」、詳細で  
膨大な「注」、的確な「現代語訳」を作成していただき、それに私  
が加筆し、それを訂正していただいて、授業で読み合わせをして、  
完全な原稿を作成したものである。

伊藤光壽氏には、『天台六妙法門』『天台小止観』に引き続いて、  
今回もご尽力いただけることに、衷心よりお礼を申し上げます。あ  
る。伊藤光壽氏のお蔭で、このような成果を世に送り出すことが  
できることに心より感謝申し上げます。次第である。

伊藤光壽氏をはじめ、大学院受講生全員の智慧を結集してでき上  
がった研究成果であるが、恐らく誤記・誤読など多くあることと思  
われる。その責任の全ては、私にあることをお断りしておきたい。

本論文の構成は、最初に「原文」と「書き下し文」を、つぎに

「注」を、最後に「現代語訳」を付していくことにしたい。

## 〔原文〕

### 私序王

夫理絶偏圓。寄圓珠而談理。極非遠近。託寶所而論極。極會圓冥事理俱寂。而不寂者長由耽無明酒。雖繫珠而不覺。迷涅槃道。路弗遠而言長。聖主世尊愍斯倒惑。四華六動開方便之門。三變千踊表眞實之地。咸令一切普得見聞。發祕密之奧藏。稱之爲妙。示權實之正軌。故號爲法。指久遠之本果。喻之以蓮。會不二之圓道。譬之以華。聲爲佛事。稱之爲經。圓詮之初目之爲序。序類相從稱之爲品。衆次之首名爲第一。釋曰。談記是敘名。會冥是敘體。圓珠是敘宗。俱寂是敘用。四華六動是敘教。本迹可レ知。

## 〔書き下し文〕

### 私序王<sup>(1)</sup>

それ理は偏圓を絶すれども、円珠に寄せてしかも理を談ず。極は遠近にあらざれども、宝所に託してしかも極を論ず。極会し円冥すれば、事理ともに寂なり。

しかるに寂せざるは、まことに無明の酒に耽りて、珠を繫ぐとい

えども、しかも覚らざるに由る。涅槃の道に迷いて、道遠きにあらざれども、しかも長しという。

聖主世尊は、この倒惑をあわれみ、四華六動して、方便の門を開き、三變千踊して、眞實の地を表わし、ことごとく一切をして、あまねく見聞することを得せしむ。

祕密の奥蔵を発く、これを称して妙となす。権實の正軌を示す、ゆえに号して法となす。

久遠の本果を指す、これを喩うるに蓮をもつてす。不二の円道に會す、これを譬うるに華をもつてす。声、仏事をなす、これを称して経となす。

円詮の初め、これを目して序となす。序類あい従う、これを称して品となす。衆次の首めを、名づけて第一となす。

釈していわく、談記(託)はこれ名を叙ぶ。会冥はこれ体を叙ぶ。円珠はこれ宗を叙ぶ。俱寂はこれ用を叙ぶ。四華六動はこれ教を叙ぶ。本迹、知んぬべし。

## 〔注〕

(1) 私序王Ⅱ「序」は、經典を講述するときは、初めに予め一經の趣旨を明瞭に示して、説法を起す端緒とするものをいう。「王」は、初め、起すの意をいう。

私序王の「私」は筆録者の章安をいう。章安が、大師の眞意を推し

量り、広く人々に示そうとする立場に立つて述べたのが、この序文であるとされる。

なお私序王には、智顛の譚玄本序を含む。譚は談と同義。ほしいままに、自由自在に話し語ること、その話、物語をいう。

(2) それ理は偏円を絶すれども、円珠に寄せてしかも理を談ず「夫・それ」は、「それ」と訓み、そもそも、一体の意。話題を変えて、相手の注意を引くことばである。

「理」は、究極の理をいう。『法華経』で説き明かす三乗を開き顕わした一仏乗を含めた、『法華経』が説き明かす真実の道理をいう。

「偏円」は一般的に、偏は一つの極端に片寄ったもの、円は一切が完成した完全無欠なものを指す。偏円は、教理の優劣を判定する基準であり、小乗の二乗と大乘にあてはめたり、あるいは大乘のうちの権教と実教とにあてはめたりする。権教は、一方に片寄った教で、真実の大乘の教えに入るための方便として、人々の宗教的な素質や能力や性質に依じて、仏が説いた仮の教えであり、天台では『法華経』以外の経典をいう。実教は、円満完全な真実の教えで、天台では『法華経』をいう。

ここでは「偏円」の偏は偏教、つまり『法華経』以外の経典の権教をいい、円は円教、つまり『法華経』の実教をいう。

「絶」は、一般的には超絶と同義、かけ離れること、他より越え勝れること、世に絶していることをいう。ここでは、『法華経』以外の経典と『法華経』との二つの間の乖離や断絶を超越しており、世の常識を打ち破ることをいう。

「円珠」は、完全な宝珠。『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠の譬喩に基づく、衣の裏に縫いつけられた値段がつけられない

いほど貴重な宝石である、無価の宝珠を指す。

「寄せて」の寄は、寄顯と同義。寄は一般的に、頼り寄り縋ること、拠り所とすることをいう。ここでは、ことばに表わして表現することをいう。

従って一句は、一体、三乗を開き顕わした一仏乗のような、『法華経』が述べようとする究極の真実の道理というものは、片寄った偏、つまり『法華経』以外の経典と、完全無欠な円、つまり『法華経』との間に介在する乖離や断絶を超越し、『法華経』が、『法華経』以外の経典と『法華経』とを繋ぐ、三乗から一仏乗への道筋をつけている。

このことは、『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠の譬喩に基づいた、衣の裏に縫いつけられた値段がつけられないほど貴重な宝石である、無価の宝珠にこと寄せて、『法華経』が目的とする、一仏乗のような究極の真実の道理を説明することができる、の意をいう。

参考——「衣珠喩」について

「衣珠喩」は、繫珠喩ともいう。『法華経』五百弟子受記品第八(大正蔵九・二九 a と b) に出る。

ある人が親友の家へ行って酒に酔って眠ってしまった。親友は所用があったので、無価の宝珠をその人の衣の下に縫いつけて出た。その人は、そのことを知らないで帰途につき、他国に流浪して貧苦に苦しんだ。その後、前の親友に会い、つぶさに前後の事情を聞き知って、その後は裕福な生活を送ったという。

すなわち、二乗人が過去世に大通智勝仏のもとで大乘の縁を結んだが、無明のために悟ることができずにいたが、いま『法華経』によって如来の方便開示を受け、遂に一仏乗に入ることができたのを例え

る。

なお、一般的には、衆生が本来もっている仏性を例えて衣裡の宝珠、衣内の明珠ともいう。

(3) 極は遠近にあらざれども、宝所に託してしかも極を論ず。『極』は理極と同義、妙法の果をいう。究極のこと、究極の理、究極の境地、最上の事柄をいう。ここでは、『法華経』が説く修行実践によって、到達しなければならぬ一仏乗のような究極の目的地、終着点をいう。

「遠近」の遠は、一般的に遠く隔たっていることをいい、近は、空間的に近いことをいう。ここでは、遠は大乗の真実の涅槃、近は小乗の二乗の涅槃を指す。特に、『法華経』化城喻品第七に説かれる化城宝処の譬喩に基づいて、遠は五百由旬の宝処、つまり真実の涅槃をいい、近は三百由旬のところに化作された化城、つまり二乗の涅槃をいう。「宝所」はこれをいう。

「託して」は仮託と同義。仮託はかこつけること、こと寄せることをいう。

従って一句は、『法華経』が説く修行実践によって到達しなければならぬ一仏乗のような究極の目的地は、遠いとか近いとかという距離によって示されるものではない。しかしこのことを、『法華経』化城喻品第七に説かれる化城宝処の譬喩に基づいて、遠いは真実の涅槃を指す五百由旬の宝所にこと寄せ、近いは二乗の涅槃を指す三百由旬のところに化作された化城宝所にこと寄せて、究極のことわりを論じるのである、の意をいう。

参考——「化城喩」について

「化城喩」は、宝処化城の喩ともいう。『法華経』化城喻品第七(大

正蔵)九・二五c一(二六a)に見える。

悪道を経て、五〇〇由旬先にある宝処(真実のさとりの世界)に到ろうとする多衆のなかの導師が、途中で疲れて引き返そうとする衆人に對して、途中の三〇〇由旬のところに仮に幻の化城(方便のさとりの世界)を現わして一旦休憩させ、疲れを癒させた上で、その後、真の目的地の宝処へ向かっていかせたことをいう。

小乗の悟りは、大乘の『法華経』の悟りに到るための方便であることとを、比喩的に言い表わしたものである。

(4) 極会し円冥すれば、事理ともに寂なり。『極』は理極と同義。究極のこと、究極の理、究極の境地、最上の事柄をいう。ここでは『法華経』が説く修行実践によって、到達しなければならぬ目的地、宝所が象徴する一仏乗という目的地をいい、菩薩は菩薩として、縁覚は縁覚として、声聞は声聞として、龍女は龍女としてそのまま一仏乗に帰入することをいう。

「会」は、合すること、統合し併合すること、合致することをいう、帰着させること、よく物事のことわりを会得することをいう。

従って「極会」は、五〇〇由旬先にある宝所が象徴する一仏乗という、最終的な『法華経』の修行目的を達成することをいう。

「冥」は冥合と同義。知らないうちに合うこと、自然のうちに一致することをいう。ここではびったり合うこと、一致することをいう。

従って「円冥」は、『法華経』によって、偏と円、本と迹、権と実のような相対的なものが同化し、融合し、一仏乗に帰着することをいう。

「事理」は、事が『法華経』が説く修行実践によって到り着く目的地をいい、理が『法華経』が説き示す究極の真実をいう。

「寂す」は、寂滅・寂滅現前と同義。一般的に、静寂な悟りの境地を味わうこと、究極の悟りの境地にあることをいう。ここでは、究極の一仏乗に帰入すること、諸法実相の悟りのあるがままにあることをいう。

従って一句は、そのようにして、五百由旬先の宝所が象徴する一仏乗という『法華経』の最終的な修行目的を達成し、『法華経』によって偏と円、迹と本、権と実のような相対的なものが同化し、融合し、一仏乗に帰着すれば、『法華経』が説く修行実践によって到り着く目的地も、『法華経』が説き示す究極の真実もあるがままに現われることになる、の意をいう。

(5) しかるに寂せざるは 〓 「しかるに」は、前句を受けて、そうではあるけれどもの意をいう。

「寂せざる」は、五百由旬先の宝所が象徴する一仏乗にたどり着き帰着すること、つまり一仏乗に入ることができないのはの意をいう。従って一句は、そうではあるけれども、一仏乗に入ることができないのはの意をいう。

(6) まことに無明の酒に耽りて、珠を繫ぐといえども、しかも覚らざるに由る 〓 「良」は、まことにと訓む。偽りなく、本当に、真実はの意をいう。

なお、まことには、文尾の由ると連動して、真実はあるの意をいう。

「無明酒」は、『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠の譬喩に基づく語である。無明の酒に酔った人が、親友によって衣の裏に縫いつけられた宝珠に気づかなかつたこと、すなわち一仏乗の涅槃の道に迷っていることを指し、無明がひとの本性を酔わせることを酒

に例え、酒が無明を起ささせる原因となることをいう。

「珠を繫ぐといえども、しかも覚らざる」は、『法華経』五百弟子受記品の衣裏繫珠の喩え。「世尊よ、我等、常にこの念を作して、自ら已に究竟の滅度を得たりとおもいき。今、すなわちこれを知りぬ。無智のもののごとし。所以はいかん。我等まさに如来の智慧を得べかりき。しかるをすなわち自ら小智をもって足りぬとなしき。

世尊よ、譬えば人あり、親友の家に至りて、酒に酔うて臥せるがごとし。この時に親友、官事のまきに行くべきあつて、無価の宝珠をもつてその衣裏に繫げ、これを与えて去りぬ。その人酔い臥して、すべて覚知せず。起きおわつて、遊行し他国に到りぬ。衣食のための故に、勤力求索すること、はなはだ大いに艱難なり。もし少し得るところあれば、すなわちもつて足りぬとなす。後に親友会い遇うて、これを見てこの言を作さく、『咄なる哉、丈夫よ。なんぞ衣食のためにすなわちかくのごとくなるに至る。われ昔、汝をして安樂なることを得、五欲に自ら恣にらしめんと欲して、某の年日月において、無価の宝珠をもつて、汝が衣の裏に繫げぬ。今なお現に在り。しかるを汝知らずして、勤苦し憂悩して、もつて自活を求むることにはなはだこれ癡なり。汝、いまこの宝をもつて所須に貿易すべし。常に意のごとく、乏短なるところなかるべし』(『大正蔵』九・二九 a) の取意の文である。

従って一句は、真実は、『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠の譬喩が教えるように、無明の酒に酔い痴れて、己れの本性を狂わせた人が、親友が縫いつけてくれた衣の裏の無価の宝珠に気づかなかつたように、一仏乗という涅槃の道に迷っていることにあるのである、の意をいう。

参考——天台の「無明」について

「無明」は、サンスクリット語のア・ヴィドヤーの訳。一般的に、ものごとをありのままに見ることができない不如実智見をいう。すなわち真理に暗くもものごとに通達せず、事象、道理をはつきりと理解できない状態で、愚癡をそのすがたとする。

つまり無明は、人が何も分かっていないことをいう。人は何もかも分かった心算であれかこれを分別しながら日々を生活しているが、実は、最も大切な人生の大事は分かっていない。一体、自分はどこから来たのか。一体、自分は命を終えた後、どこへ行くのか。一体、自分は何者なのか。これらの人生の大事については、誰も何も知らない。人は分からないという事実から人生を出発する。分からないという事実から出発しているのに分かった心算でいるところに、苦しみが発生する。発生した苦しみが次から次へと苦しみを生み続けていく。こうして人は苦しみの大海に呻吟することになる。無明はこれをいう。

天台では、無明は、非有非空の理に迷い、中道を障えるものとし、空・仮・中の三観によって、それぞれ見思の惑、塵沙の惑、無明の惑という三惑を断つとする。

無明を断つのに、別教では十廻向で伏し、初地以上の十二の階位で十二品の無明を断ち終わるとする。この場合、十廻向の最後の第十廻向で初めての無明を断って初地に入るが、この初めの無明をまた三品に分けて断つから、それを三品の無明という。

円教では、初住以上の四十二の階位で四十二品の無明を断ちおわるが、この場合第五十一位である等覚の最後心で妙覚智が現われ、それによって断たれる最後の無明を元品の無明、無始の無明、最後品の無

明という。

ただし以上は一応の説で、実は円教では三観には順序次第を立てず、一心をもって観じるのであるから、三惑は同体で同時に断たれるという。

(7) 涅槃の道に迷いて、道遠きにあらざれども、しかも長しという『法華経』化城喻品に説かれる化城宝処の譬喩に基づく。三百由旬の所に化作された城市が化城であり、化城がいう二乗の涅槃を、真実の涅槃と思ひ込んで、五百由旬の所にある宝処を遠いと思うことを指す。

「涅槃」は、サンスクリット語のニルヴァーナの音写語。火を吹き消した状態を語源とし、煩惱の火を吹き消した静寂の境地で、仏教における悟りの境地、悟りの智慧、菩提を完成した、誰もが成仏することができるとする一仏乗の境地をいう。

「涅槃の道」は、誰もが成仏することができるとする一仏乗への道をいう。

「道遠きにあらざれども」は、衣裏宝珠の喩えが教えるように、一仏乗への道は実際には目の前の身近にあることをいう。つまり、他国を流浪していた者が、わが家に帰って来て落ち着くように、人間が生まれながらにもっている仏性に帰って、安住する「帰家穩坐」を内意する。

「しかも長しという」は、一仏乗への道は実際には目の前の身近にあるから、遠くに求める必要がないが、一仏乗への道を踏み違えるから化城喩品が教えるように、これ以上先に行けない、道は長いということをいう。

従って一句は、誰もが成仏することができる一仏乗への道は、踏み

間違えなければ衣裏宝珠の喩えが教えるように、実際は目の前の身近にあつて、遠くに求める必要がないが、無明の酒を呑み無明の酒に酔い潰れて、一仏乗への道を踏み間違えるから、化城喩品が教えるように、これ以上先に行けないといい、その道程は長く果てしないというのである、の意をいう。

参考——「涅槃」について

「涅槃」は、サンスクリット語ニルヴァーナの音写。泥洹、泥日、涅槃那なども書き、滅、寂滅、滅度、寂と訳す。択滅、離繫、解脱などと同義、また般涅槃大般涅槃ともいう。

元來は吹き消すこと、吹き消した状態を表わし、燃え盛る煩惱の火を滅尽して、悟りの智慧すなわち菩提を完成した境地をいう。これは迷いの世界である生死を超えた悟りの世界で、仏教の究極的な実践目標であり、それ故に仏教の特徴を表わす法印の一として涅槃寂靜を数える。

小乗の部派仏教では、涅槃とは煩惱を滅し尽くした状態であるとし、煩惱は断つたが肉体はなお残存する有余依涅槃と、灰身滅智の状態で、すべてが滅無に帰した無余依涅槃の二涅槃に分ける。

大乘では、涅槃を積極的なものと考え、常・楽・我・淨の四徳をもつ涅槃を無為涅槃とし、最上とする。

唯識学派では、本来自性清淨涅槃と有余依涅槃と無余依涅槃と無住処涅槃の四種の涅槃を挙げる。

天台教学では、性淨涅槃と円淨涅槃と方便淨涅槃の三涅槃に分ける。本来自性清淨涅槃をいう性淨涅槃は、すべてのものの本性に本来具わっているのは不生不滅の理そのものであるとして、真実を指している。円淨涅槃は、道を修めることによって煩惱の汚れを除いて得る

涅槃をいう。方便淨涅槃は、仏が衆生を救うために仮に姿を現わしたが、縁が尽きて入る涅槃をいう。

参考——「菩提」について

「菩提」は、サンスクリット語のボーデイの音写。覚、智、知、道と訳す。

仏・菩薩・縁覚・声聞がそれぞれの修行の結果得る悟りの智慧をいい、この四種の菩提のうち、仏の菩提はこの上ない究極のものであるから阿耨多羅三藐三菩提と名づけ、訳して無上正等正覚、無上菩提などという。

『大智度論』卷第五十三(『大正蔵』二五・四三八a)には、仏の菩提について、

(1)菩薩が悟りを求める心を発こすのを、その心は菩提の結果に到る原因であるとの意から発心菩提

(2)煩惱を抑えて諸波羅蜜を行うのを伏心菩提

(3)諸法実相を悟った般若波羅蜜の相を明心菩提

(4)般若波羅蜜において方便力を得て、般若波羅蜜にとらわれず煩惱を滅して、一切智(薩婆若)に到るのを出到菩提

(5)仏果の覚智を無上菩提と名づけて、合わせて五種菩提という。

『法華經論』卷下には、仏の法・報・応の三身について、法仏菩提(法身菩提)、報仏菩提(報身菩提)、応仏菩提(応身菩提)の三種菩提を立てる。

『大乘義章』卷第十八(『大正蔵』四四・八一八c)には、無上菩提に方便菩提と性淨菩提の二種があるとする。

天台教学では、十種の三法の一に三菩提を数えて、

(1)実相の理を悟るを真性菩提(実相菩提、無上菩提)

(2)その理にかなった智慧を悟るのを実智菩提(清浄菩提)  
 (3)自由自在に衆生を教化するはたらきを悟るのを方便菩提(究竟菩提)とする。

そして、無上菩提を求める衆生を菩提薩埵、略して菩薩といい、無上菩提を求める心を無上菩提心、無上道意、または菩提心などという。

『大日経』住心品に、「いかんが菩提なるや。いわく、如実に自心を知るなり」(『大正藏』一八・一c)とある。

つまり、菩提の本性は自心であり、菩提即心、心即菩提であると知って、自己の本心に帰ることをいう。

(8) 聖主世尊は、この倒惑をあわれみ、四華六動して、方便の門を開き、三変千踊して、真実の地を表わし、「聖主世尊」の聖主は、諸聖人の主の意。世尊は、仏の尊号をいい、世にも尊い尊敬されるべき人といい、釈尊をいう。如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊という仏の十号の一。

従って聖主世尊は、諸聖の主の意をいう。

「倒惑」は、顛倒した惑、道理に背く逆さまの迷い、間違った考え方をすることをいう。つまり、わたしがこれかあれかを比較し、取捨選択し、選択したものにこだわり、執著に執著を重ねていくことをいう。

「四華六動」は、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華が天から降り注ぎ、大地が東西南北および上下の六種に震動することをいう。

「方便の門を開き」は、それまで正しい究極の教えとばかり思って信じていた『法華経』以前の三乗の教えを、実は一仏乘に到らせる方

便の教えであったと開き明かすことをいう。

「三変千踊」の三変は、『法華経』見宝塔品に、釈迦牟尼仏が十方から来集した分身の諸仏を容れるために、この娑婆世界を変じて清浄となし、さらに二度にわたって八方の二百万億那由他の国土を変じて清浄となした「三変土田」をいう。

千踊の千は無量千万億の千をいい、踊は、涌に通じる。『法華経』從地涌出品に、『法華経』を説く菩薩が無量千万億も地中から湧き出たことをいう。

「真実の地」の地は、一般的に土・土地・国土をいい、立場・本性・事実をいう。ここでは、三変千踊と連動するから、真実の地は真実の国土の意から、真実の立場、すなわち永遠に変わることのない究極の教えである一仏乘をいうと取る。

従って一句は、諸聖人の主であり、世にも尊い尊敬されるべき人釈尊は、世の人々が、これかあれかにとられる相対的な分別を超越し離脱することができずにおり、執著に執著を重ねていることを憐れに思い、天から曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華という四種の花を降らせ、大地を東西南北と上下の六種に震動させた。

そして、それまで声聞や縁覚は勿論、世の人々が正しい究極の教えとばかり思って信じていた『法華経』以前の三乗の教えを、実は一仏乘に到らせる方便の教えであったと開き明かした。

そしてさらに、『法華経』見宝塔品第十一にあるように、釈迦牟尼仏が十方から来集した分身の諸仏を容れるために、この娑婆世界を変えて清浄とし、さらに二度にわたって八方の二百万億那由他の国土を変えて清浄の国土とし、『法華経』從地涌出品第十五にあるように、『法華経』を説く菩薩を無量千万億も地中より湧き出させて一仏乘を



受持し供養させ、究極の一仏乘を明瞭に表に顕わした、の意をいう。

参考——「四華六動」について

「四華六動」は、目出度いしるしの瑞相をいう。例えば、『法華経』が説かれるときには、先ず『無量義経』が説かれたが、その聴衆が後の『法華経』の説法を聞こうとして座を去らず、釈迦牟尼仏が結跏趺坐して無量義処三昧に入るなど、目出度いしるしがあつたことをいう。これを法華六瑞という。法華六瑞相は、説法瑞・入定瑞・雨華瑞・地動瑞・衆喜瑞・放光瑞をいう。

雨華瑞である「四華」は、『法華経』序品に説かれる「この時に、天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨らし、天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨らし、よる。四種の花、すなわち曼陀羅華（マーンダラーヴァ）・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華（マンジュージャカ）・摩訶曼殊沙華が天から降り注いだことを指す。

なお、『無量壽経』卷上（『大正蔵』一・二・二七二b）で、極樂浄土の莊嚴として説かれる四華は、優鉢羅華（ウトパラ・青蓮華）・鉢特摩華（パドマ・紅蓮華）・拘勿頭華（クムダ・白蓮華）・分陀利華（ブンダリーカ・大白蓮華）をいう。

地動瑞である「六動」は、『法華経』序品に四華に続いて説かれる「普仏世界六種に震動す」（『大正蔵』九・二b）とある文により、六種に大地が震動したことを指す。東西南北と上下の震動をいう六動は、六種震動、六種動相、六変震動、六辺震動、六震などという。仏が説法するとき大地が六通りに震動することをいう。

新訳の『華嚴経』卷第十六（『大正蔵』一〇・八五c）には、揺れる形とその時の首から、動・起・涌・震・吼・覺または撃の六種があ

り、六種のそれぞれに遍または等遍という接頭辞を伴う三種があつて、細別すると十八種の震動があり、これを十八種震動相という。

動は、一方に動くこと、起は揺れ始めること、涌は湧き出ること、これら三つは地動をいう。震は陰陰たることを、吼は咆哮を、覺または撃は大声をいう。これら三つは地動の声をさす。また、遍は四方に動くことをいい、等遍は八方に動くことをいう。

『摩訶般若波羅蜜経』卷第一（『大正蔵』八・二一七c）は、地動の方向によって、東踊西没・西踊東没・南踊北没・北踊南没・辺踊中没・中踊辺没に分ける。

『大般若波羅蜜多経』卷第一（『大正蔵』五・二b）は、地動の方向によって、六種変動は、動極動・等極動、踊極踊・等極踊、震極震・等極震、撃極撃・等極撃、吼極吼・等極吼、爆極爆・等極爆をいい、東踊西没・西踊東没・南踊北没・北踊南没・中踊辺没・辺踊中没に分ける。

なお釈尊の一生において、六回大地が震動したことを「六時動」という。一般的に入胎・出胎・成道・転法輪・魔の請いを入れて命を捨てようとした時・入涅槃の六をいい、『涅槃経』卷第二では入胎・出胎・出家・成道・転法輪・入涅槃の六をいう。

参考——「三変千踊」について

「三変」は、『法華経』見宝塔品第十一（『大正蔵』九・三三a-b）に説かれる「三変土田」のことをいう。

「その時に、この娑婆世界は、たちまちのうちに一変して清らかになつた。大地は瑠璃でできており、宝樹がおそかにこの世界を飾り、黄金を繩にして、それによって八つの道を境い、多くの聚落・村々・都城・大海・大河・山や川・林や草木の茂みはなく、大きな宝

玉のような香をたき、曼陀羅の華は地面一面に散り敷き、宝玉づくりの網や幕が懸けられて覆われており、多くの宝の鈴がかかっていた。

(中略)時に釈迦牟尼仏、所分身の諸仏を容受せんと欲するが故に、八方におのおのさらに二百万億那由他の国を変じて、みな清浄ならしめたもう。地獄・餓鬼・畜生および阿修羅あることなし。また諸の天・人を移して他土に置く。所化の国、また瑠璃をもって地となし、宝樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝・葉・華・菓、次第に嚴飾せり。樹下にみな宝の師子座あり。高さ五由旬、種種の諸宝、もつて莊・校となす。(中略)釈迦牟尼仏は、諸仏のまぎに來たり坐したもうべきがための故に、また、八方においておのおのさらに二百万億那由他の国を変じて、みな清浄ならしめたもう。地獄・餓鬼・畜生および阿修羅あることなし。また諸の天・人を移して他土に置く。所化の国、また瑠璃をもって地となし、宝樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝・葉・華・菓、次第に莊嚴せり。樹下にみな宝の師子座あり。高さ五由旬、また大宝をもってこれを校・飾せり。(中略)その時に、東方の釈迦牟尼仏の所分の身の、百千万億那由他恒河沙等の国土のなかの諸仏の、各各に説法したまえる、ここに來集せり。かくのごとく、次第に十方の諸仏、みなことごとく來集して、八方に坐したもう。その時に、一一の方の、四百万億那由他の国土に、諸仏如來そのなかに遍満したまえり。」

多宝塔を供養させ、多宝塔内の多宝如來のすがたを見るためには、釈尊の分身仏を十方世界から集合させなければならぬ。十方の分身の諸仏を集め、諸仏を容れるためには娑婆世界を浄化しなければならぬ。そこで釈尊は、娑婆世界の汚れを浄化し続いて八方の二百万億那由他の穢土を二回にわたって浄化し、清浄の国土に変えたことをい

う。

なお那由陀はインドの大多数の一つで、十の十一乗で一千億に相当するとされる。二百万億那由他は、『俱舍論』に出る単位によれば、二百万×一億×一十億で、二×十の二十五乗に相当するといふ。

「千踊」は、『法華經』從地涌出品第十五(大正藏)九・三九c(四〇a)に説かれる、娑婆世界の三千大千の国土、すなわち世界全体の大地が震動して大地が割れ、そのなかから、無量千万億の菩薩が、身は金色をし、三十二相の見事な特相を具え、身から光を放つて涌出したことを指す。

他の国土から來たガンジス河の砂の数より多い者が、仏に合掌して「世尊よ、世尊の入滅後、わたくし達が、この娑婆世界で精進して、『法華經』を護持し、誦誦し、書写し、供養し、広く説きましよう」といった。

それに対して、おまえたちがこの経を護持する必要はない。娑婆世界には六万のガンジス河の砂の数に等しい菩薩がいる。この者たちが経を供養し護持するであろうという釈迦牟尼仏の聲に應じて、「仏、これを説きたもう時、娑婆世界の三千大千の国土、地、みな震裂して、そのなかより無量千万億の菩薩摩訶薩あつて、同時に踊出せり。この諸の菩薩は、身みな金色にして、三十二相、無量の光明あり。先より尽くこの娑婆世界の下、この界の虚空のなかにあつて住せり。この諸の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声を聞いて、下より發來せり」と涌出したことをいう。

なお千踊の踊は涌に通じて用いられ、「踊出」で現われ出ることをいい、「踊現」は高く現われ出ることをいう。踊は、上がる、昇るをいう。

(9) ことごとく一切をして、あまねく見聞することを得せしむ<sup>11</sup>「ことごとく一切をして」は、説法の会座に集まった法華会中の声聞・縁覚・菩薩の「三乗」、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の「四衆」、および天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の「天龍八部衆」などの聞法者を指す。

「あまねく見聞することを得せしむ」は、奇瑞を実際に見せたり、説法を聞かせたりして信仰を確かなものとするをいう。

従って一句は、こうして、法華会中の三乗・四衆・天龍八部衆などの聞法者を始め、あまねく一切の生けるものに、四華六動や三変千踊などの奇瑞を実際に見せたり、説法を聞かせたりして、信仰を確かなものとすると同時に、真実の一仏乘に導き入れたのである、の意をいう。

(10) 秘密の奥蔵を発く、これを称して妙となす<sup>12</sup>『妙法蓮華経』の經題の「妙」は、「秘密の奥蔵を發く」ことをいう。

「秘密」は、一般的に、凡夫には容易に知ることができない深遠な奥義、奥旨をいう。あるいは、仏が直接に明示して説かず、ある隠された意味をもって説くことや、はなはだ奥深く微妙なので衆生に分からせないことや、仏が教えを受ける資格のない非器に対して説かないことをいう。

天台教判の秘密教では、自分一人だけが仏の教えを聞いていると思わせることや、同じ教えを聞きながら了解のしかたが異なり、それを互いに知らせないような説き方をいう。

「奥」は、深遠なことをいう。

「蔵」は、蔵、抛り所、教えが集積された蔵、教えの蔵をいう。

「秘密の奥蔵」は、後秦の僧叡の『妙法蓮華経後序』(『大正蔵』

九・六二b)にあるように、『法華経』全体が「諸仏が今まで秘密にしていた教えを明かす」こと、つまり、『法華経』全体が秘密の蔵である一乗の真実を明かすことを意味する。

秘密の奥蔵は、『法華経』では、法師品第十に「この経はこれ、諸仏の秘要の蔵なり」(『大正蔵』九・三一b)と秘要の蔵と表わされ、信解品第四に「一切の諸仏の秘宝の法は、ただ菩薩のためにその実事を述べて」(『大正蔵』九・一八b)と秘宝の法と表わされ、妙莊嚴王本事品第二十七に「その王の夫人は、諸仏集三昧を得て、よく諸仏の蔵を知る」(『大正蔵』九・六〇b)と諸仏の蔵と表わされている。

「發」は、開と同義、開くことをいう。

「妙」は、ことばでいい表わしたり心で推し量ることのできない、超えて勝れた不可思議をいう。ここでは、秘密の奥義、すなわち一仏乘を開くことをいう。

いろいろ不可思議がある。そのなかで、わたしという人間が存在するということ柄以上の不可思議はない。人は何者であるかという、人の本質そのものに直参していくことが、不可思議であり妙そのものといえる。

従って一句は、『法華経』によれば、声聞・縁覚の二乘人は勿論、菩薩も、生ける衆生はことごとくそのまま仏に救い取られる存在である。生けるものすべてが仏になるために、『法華経』以前の諸経は、生けるもすべての宗教的な素質や能力や性質に応じて声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えを説いたのであって、生けるものすべてが仏となることができるとする一仏乘の教えに至る方便が、声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えであるに過ぎないとする。このような、だれもが仏になることができるとする一仏乘という深遠な教えの蔵を、『法華経』が初め

て開けたことが、超えて勝れた不可思議である。この超えて勝れた不可思議を「妙」という、の意をいう。

参考——「秘密の奥蔵」について

「秘密の奥蔵」は、後秦の僧叡の『妙法蓮華経後序』の冒頭に、「法華経者。諸仏之秘蔵。衆経之实体也」(『大正蔵』九・六二b)とある。『法華経』は『法華経』全体が、諸仏が今まで秘してきた秘密の教えであり、数多ある經典の大本であるという。開三顯一、つまり、三乗は一仏乗を明らかにするための方便であることを打ち明けて絶対の一仏乗を顕わすことが、『法華経』前半十四品の秘密の教え、諸經典の大本であり眼目である。

法師品には、「その時に仏、薬王菩薩摩訶薩に告げたまわく、我が所説の經典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。しかもその中において、この法華経、最もこれ難信難解なり。薬王よ、この経はこれ、諸仏の秘要の蔵なり。分布して、妄りに人に授与すべからず。諸仏世尊の守護したもうところなり。昔よりこのかた、未だかつて顯説せず。しかもこの経は、如来の現在すら、なお怨嫉多し。いわんや、滅度の後をや」とある。

『法華経』は、今まで説いた無量千万億にのぼる經典のうちで、最も信じがたく、理解しがたい經典である。『法華経』は、仏だけの秘密の教えであつて、分かち広めて、妄りに人に授けてはならない。『法華経』は、今までに明らかに説かれたことがなかったという。『法華経』以前には説かれることがなかった一仏乗は、当時の新しい思想であり、一仏乗の根拠は仏性にあるとされる。だれもが仏になることができるとする一仏乗の教えは、当時は受け入れがたい思想であり、他の人々から怨みや嫉妬を受け、さらには迫害を受けるに至った内容

であつた。

『法華経』が説かれる以前の諸經のうち大乘仏教が説かれる以前は、声聞には声聞の教えを、縁覚には縁覚の教えを、菩薩には菩薩の教えが説かれた。従つて、声聞・縁覚・菩薩の三乗のそれぞれが、それぞれの修行の道を経て、阿羅漢・辟支仏・仏になることができるという教えであり、声聞は阿羅漢を終極とし、縁覚は辟支仏を終極とし、菩薩は仏を終極とした。だから声聞・縁覚の二乗人は、決して仏になることができなかつたし、仏にならうとしなかつた。

『法華経』が説かれる以前の諸經のうち大乘仏教が説かれるようになってからは、人は声聞に入つて声聞の教えを極め、声聞の教えを極めた上で縁覚に入つて縁覚の教えを極め、縁覚の教えを極めた上で菩薩に入つて菩薩の教えを極め、自利行だけでなく利他行をも完成して仏になることができるとされた。

『法華経』が説かれる以前の大乗の諸經では、人は声聞を成就し、縁覚を成就し、菩薩を成就して初めて仏となる可能性が生まれるのである。

『法華経』は、そうではなくて、声聞・縁覚の二乗人は勿論、菩薩も、生ける衆生はことごとくそのまま仏に救いとられ、仏となる存在であるとする。すべてが仏になるために、生けるものの宗教的な素質や能力や性質に応じて、声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えが説かれただけであつて、すべてが仏となることができるとする一仏乗の教えに到る方便が、三乗の教えであることが明かされ、声聞・縁覚・菩薩の三乗人を始め人はすべてそのまま仏に救い取られ、仏となる可能性があることが明かされた。

「秘密の奥蔵は、『妙法蓮華経後序』に「法華経は諸仏の秘蔵であ

る」とあり、『法華經』法師品に「諸仏の秘要の藏なり」とあるが、これ以外にも、信解品第四に「一切の諸仏の秘宝の法は、ただ菩薩のためにその実事を述べて」とある。秘宝の法はただ菩薩のためだけに、これまで秘密としてきた真実を明かすと述べており、妙莊嚴王本事品第二十七に「その王の夫人は、諸仏集三昧を得て、よく諸仏の藏を知る」とある。妙莊嚴王の淨徳夫人、すなわち淨藏と淨眼二王子の母は、多くの仏のことを深く考えることができる統一力である諸仏集三昧を得ていた。この三昧で、諸仏の教えの秘奥を知ることができたのである。

つまり、『法華經』全体が秘密の奥藏であり、『法華經』前半十四品では、『法華經』で初めて開き明かした、開三顯一の一仏乗の真実を、秘密の奥藏は意味する。

参考——「妙」と「十妙」について

「妙」は、ことばでいい表わしたり心で推し量ることができない不可思議をいう。『法華玄義』は巻第二上、巻第七上などに、十種の超え勝れた不可思議を、「十妙」として明かす。

智顛は、『法華經』の経題、すなわち『妙法蓮華經』のなかの最初の「妙」の一字を解釈して、これに十種の意味が含まれているとし、迹門の十妙、本門の十妙、観心の十妙を説いた。

(一)「迹門の十妙」は、『法華經』の前半の十四品、特に方便品の、すべての存在がそのままにある真実のありのままのすがたをいう「諸法実相」の意味に基づき、藏・通・別の三教や、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩の九界などの権(方便)を、円教や仏界などの実(真実)と対比すると、権は粗末な籠であり、実は超え勝れている妙であるとする。これを相待妙とい

う。

また、権にとらわれる心を開き除いて実の意味をあらわせば、権は権即実として実に収められるから、法華一乗では、権実共に妙であるとする。これを絶待妙という。

法華の妙は、法華以前の諸経の籠に比較しての相待的な妙であると共に、相待を絶してことばも心も及ばない絶待的な妙であるとする。

(1) 境妙——智の対象となる境が妙である。

(2) 智妙——観照する智慧が妙である。

(3) 行妙——悟りに至る実践行為が妙である。

(4) 位妙——実践段階の階位が妙である。

(5) 三法妙——真性・観照・資成の三軌が妙である。すなわち、境・智・行の三妙を果についていえば三法妙であり、これに準

じて三道・三識・三仏性などの十種の三法もまた妙である。

(6) 感応妙——衆生の機感と仏の応用、すなわち導かれる者の受け取りと、導く者のはたらきとがあいかなうのが妙である。

(7) 神通妙——仏の身のはたらきの身業が妙である。

(8) 説法妙——仏の口のはたらきの言葉が妙である。

(9) 眷属妙——仏に親しみ近づいて、恵みを受ける人が妙である。

(10) 利益妙——受ける恵みや効果が妙である。

(二)「本門の十妙」は、『法華經』の後半の十四品、特に寿命品の開迹顯本の意に基づき、永遠の根元仏である久遠の本仏の妙を明らかにしたものである。

(1) 本因妙——本仏を因からいえば、その修めた因が妙である。

(2) 本果妙——その因によって得た本仏の果が妙である。

(3) 本国土妙——本仏が所在する国土が妙である。  
 (4) 本感応妙——本仏の悟りにおいて、衆生を救うはたらきが、救われる者とあいかなって妙である。

(5) 本神通妙——本仏が悟った最初に、衆生を救おうとして神通をあらわしたのが妙である。

(6) 本説法妙——本仏が悟った最初の説法が妙である。

(7) 本眷属妙——本仏によって本初に導かれた人が妙である。

(8) 本涅槃妙——本仏の涅槃は常住で本来的なものであり、人を導くために示現する涅槃とは異なることが妙である。

(9) 本寿命妙——本仏は、長短不同の寿命を自在に示現できる根元であるから、その寿命が妙である。

(10) 本利益妙——その本仏の与える恵みが妙である。

(三) 「観心の十妙」は、『法華経』の本迹二門に説かれた真理を観照する実践をいう妙観における十妙をいう。

『法華玄義』には詳しく説いていない。湛然が十不二門を説いたのは、これを明らかにしようとしたためであるとされる。

(11) 権実の正軌を示す、ゆえに号して法となす『妙法蓮華経』の経題の「法」は、「権実の正軌を示す」ことをいう。

「権実」は、権と実をいう。権は、衆生の機根に応じた、声聞・縁覚・菩薩の三乗の仮の教えをいい、実は、永久に変わることはない究極的な真実の教え、すべての人を救い取って仏にする一仏乗の真実の教え、一仏乗への道を用いる。

「正軌」の軌は、規に通じ、法と同義。「正軌」は正しい規範、正しい筋道をたどる道理があること、正しい認識の仕方をいう。

法には、任持自性・軌生物解があるという。任持は保つことを、自

性はそれ自体の固定的不変な独自の本性をいい、軌生はきまりが理解を生じさせることを、物解はものの理解をいう。従って「任持自性・軌生物解」は、それ自体の固定的不変な独自の本性を保持して改変せず、よく規範となって、人に一定の事物を理解させる根拠となるものをいう。正軌はこれをいう。

従って「権実の正軌」は、権と実という正しい道理、方便と真実という正しい道理をいい、『法華経』以外が説く三乗の教えと『法華経』が説く一仏乗の教えという正しい道理、『法華経』が説く一仏乗の教えが『法華経』以外が説く三乗の教えをすべて含めて取め取ってしまうという正しい道理をいう。

ここでは、智顛以前の、とくに吉蔵などが説く従前の、声聞から縁覚へ、縁覚から菩薩へ、菩薩から仏へという、三乗から一乗に至るとする間違っていた在り方ではなく、声聞は声聞のまま、縁覚は縁覚のまま、菩薩は菩薩のまま、つまり三乗のまま一仏乗に至るとする、正しい意味と道筋を示すことをいう。

なお「正」は、(1)如実、あるがままの姿であり、(2)離辺、極端を離れていることであり、(3)平等、だれにでもどこにでも当てはまることをいう。

「法」は、仏の教えの仏法、教法、正法をいう。法の語はすべての行為の規範、教説を意味する。つまり真理といわれるもの是不変にして普遍なる真実の道理であるから、法とよばれるのに相応しいが、この真理を説いているのが仏の教説だからである。

『法華経』の法は、権実の正軌を内包する「諸法実相」をいう。諸法実相は、存在するすべての真実のあるがままのすがたをいい、現象界のすべての事象は、差別対立をうちに含みながら生滅を繰り返す存

在であるが、実はそれがそのまま絶対の真実のすがたであり、生即滅の存在であることをいい、「世間相常住」「常自寂滅相」をいう。

「世間の相常住なり」は、『法華経』方便品第二(『大正蔵』九・九b)にあり、世間は、絶え間なく生滅変化していく無常なすがたにあるが、その世間で縁起によって成立している存在はすべて、あるがままにあつて、本来の不変の真実を顕わしていることをいう。

ことを換えれば、仏教の目的は、俗世間の有り様から、出世間の仏の世界に行くことにある。俗を超えるということは、俗とは違う天龍八部衆などの特殊なものが存在する世界を想定することになる。

しかし、世間相は俗世間をいうから、世間相常住をいうには、一旦出世間に出た者が、出世間から俗世間に戻る以外に世間相常住をいうことができない。つまり、出世間で得た目でこの俗世間を改めて見直す、出世間という特殊な有り様はどこにも存在しない。存在するのは、我々が生きている俗の、この娑婆世界だけである。俗も真も、すべてはこの娑婆世界の出来事に過ぎない。この娑婆世界以外に、どこにも真実の世界は存在しない。すべては娑婆世界で起きている事象であり、起きている事象以外に真実はない。

つまり、我々の目の前に真実が広がっており、それ以外に真実は存在しないとすることを、世間相常住はいう。

「常に自ら寂滅の相なり」は、『法華経』方便品第二(『大正蔵』九・八b)にあり、存在するものはすべて、もともとそのままのおのずから本来の涅槃の境地のすがたを示していることをいう。つまり、あるがままに存在するものはすべて、一仏乗の在り方にあり、声聞や縁覚の二乗や、それに菩薩を加えた三乗の在り方はしていないことをいう。

「号」は呼ぶこと、唱えることをいう。

従つて一句は、智顛は、智顛以前の、とくに吉蔵などが説く従前の、人は声聞から縁覚へ、縁覚から菩薩へ、菩薩から仏へという、三乗の一つひとつの境地を順序に完成して一仏乗に至るとする在り方は間違つており、真実は、声聞は声聞のまま、縁覚は縁覚のまま、菩薩は菩薩のまま、つまり、三乗のまま一仏乗に至るとするのが正しい意味と道筋であるとする。正しい一仏乗への道を示すから、「法」と名づける。法は存在するすべてが真実にある、あるがままの真実のすがたをいう「諸法実相」を本体とする、の意をいう。

参考——「権と実」について

「権」は権謀、権宜の意で、一時的なかりそめの手立てとして設けたものをいう。「実」は真実不磨の意で、永久に変わることのない究極的な真のもの<sup>まこと</sup>をいう。

「権」は善権、権方便、善権方便、仮、権仮などともいう。「実」は真、真実ともいう。

合わせて権実、真仮などといい、対照的に権教・実教、権智・実智、権人・実人などと対語として用いる。

実教は、自らの悟りをそのまま打ち明けた究極的な根本となる教えをいい、権教は他者を実教へ導くための手立てとして設けられ、実教に到達すれば廃止される教えをいう。

実智は真実智、如実智とも称して、実のようものごとを明らかに知る智をいい、権智は方便智とも称して、他を導くために手立てとして起こす智をいう。

実人は実在の人を指し、権人は権化の人ともいい、仏・菩薩などが他を導くために仮に人や天のすがたを取ったものをいう。

天台教学では、『法華経』に説く円教を実教とし、『法華経』以外の諸経の教説、すなわち仏が衆生教化にあたって用いた教法の内容である化法の四教のうち(三)藏教・通教・別教の三教を権教とする。

権と実の関係については、三権一実という。三権一実は、声聞と縁覚の二乗やこれに菩薩を加えた三乗は、釈尊四十余年の教化教導の方便によって、生ける衆生の機根に差別がなくなっているため、二乗も三乗もそのまま一仏乘に帰入し、中道の実現に入ることになる。権は直ちに実となり、権実一体となること、あたかも蓮の花と蓮の実が同時同所にあるのと同じであるという。この例えが蓮華の三喩である。蓮華の三喩は、迹門の秘密の奥蔵を、為実施権・開権顕実・廢権立実の三喩で示す。

『法華経』の前半の十四品で初めて権が権である理由が明らかにされ、真実が顕わされたとする。権教と実教とは、仏の悟りそのものからいえば平等であるとして、これを権実同体といい、仏が衆生を教化するはたらきからいえば、権教と実教とは修行も悟るところも異なるとして、これを権実異体という。

(12) 久遠の本果を指す、これを喩うるに蓮をもつてす。『妙法蓮華経』の経題の「蓮」は、「久遠の本果を指す」ことをいう。

「久遠」は、無始の永遠の過去をいう。

「本果」は、本仏の直接的な原因による果報をいう。本門の仏の果報は、真性・観照・資成の三徳をいい、真性・観照・資成の三徳を具えた本仏をいう。

「真性」は、法性真如と同義。宇宙のすべての現象がもっている真実不変の本性、つまり、一切はみな空と観る諸法実相をいう。

ことを換えれば、『大智度論』卷第三十二によれば、諸法に各各

相、つまり現象の差別的な相と実相とがあり、各各相は、例えば蠟を火にあてれば溶けてしまつて、以前の相を失うように、固定的なものでないから、それを分別して求めようとすれば遂に不可得である。不可得であるから空であり、すなわち空であることが諸法の実相であると説き、空であることがすべての差別相についてみな同一であるからその意味で如といひ、すべての相が同じく空に帰するという意味で、空を法性と名づけるとする。真性はこれをいう。

「観照」は、観照般若をいう。観照般若は、一切の存在する事象の真実絶対のすがたである実相を観照して知り抜く智慧をいうが、観照は、この観照般若の智慧で観じて、明らかに知ることという。

「資成」は、智慧の作用のものになる一切の修行をいう。

従つて一句は、仏は、近くすがた形を顕わした肉身の釈尊が終極ではない。肉身の釈尊の本仏は、菩薩として誓願を成就して久遠の昔に成仏している。本仏となる直接的原因である一切の修行のなかで、一切はみな空と観、諸法実相を明らかに観る観照般若の智慧という果報、すなわち「真性」「観照」「資成」という本仏の果報を得ている。この仏の本果を明かすのを、ハスの果実である蓮子に喩えるのである、の意をいう。

参考——「真性・観照・資成の三軌」について

天台教学で、『妙法蓮華経』の経題の「妙」を解釈するには、十妙による。その迹門の十妙うちの第五に三法妙さんぽうみょうと呼ばれる三種の軌範がある。三法妙は、真性・観照・資成の三軌が妙であることをいう。すなわち境・智・行の三妙を果についていえば三法妙である。

(1) 真性軌——一切は皆空と観る、偽りでない不変の諸法実相という対象の眞理性をいう。



(2) 観照軌——迷情を打破し、真理を顕わす智慧の作用をいう。  
(3) 資成軌——観照の智用、すなわち智慧の作用のもとになる万行・一切の修行をいう。

これに準じて苦道・煩惱道・業道の「三道」、奄摩羅識・阿黎耶識・阿陀那識の「三識」、正因仏性・了因仏性・縁因仏性の「三仏性」、実相般若・観照般若・文字般若の「三般若」、実相菩提・実智菩提・方便菩提の「三菩提」、理乘・随乘・得乗の「三大乗」、法身・報身・応身の「三身」、性浄涅槃・円浄涅槃・方便浄涅槃の「三涅槃」、法宝・仏宝・僧宝の「三宝」、法身・般若・解脱の「三徳」の十種の三法もまた妙であるとす。『法華玄義』巻第五下を参照のこと。

(13) 不二の円道に会す、これを譬うるに華をもつてす。『妙法蓮華経』の経題の「華」は、「不二の円道に会す」ことをいう。

「不二」は、異なるないこと、同じこと、同体、二つのものの対立がないことをいう。

ここでは、一面では、『法華経』の序品第一から安樂行品第十四までの、前半の迹門では、開三顯一、人はすべて一仏乗の教えに救い摂られて仏となる可能性があるとすから、声聞・縁覚・菩薩の三乗は一仏乗に至る途中の方便の教えであることを開き顕わせば、三乗人はすべてそのまま一仏乗に含め収められて、二なく同体となることをいう。

他面では、『法華経』の從地涌出品第十五から普賢菩薩勸発品第二十八までの、後半の本門では、開迹顯本、肉身の積尊を通して顕らかにした一仏乗の久遠実成の仏積尊も、本仏が応身のかたちで娑婆世界に迹を垂れた眼前の積尊も、二なく同体であることをいう。

「円道」は、空・仮・中の三諦が相互に融け合って円融した真実の道をいう。

ここでは、藏・通・別の三教、つまり声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えは、真実の一仏乗に至る方便に過ぎないということを開き顕わせば、一切はそのまま一仏乗に包摂され帰着し、久遠の昔に本地で成仏している本門の本仏積尊も、近くこの世にすがた形を顕わした迹仏積尊も、二ではなく一、一ともいえないほどの絶対の一で、同一であるという円かな道程にあることをいう。

「空」は、よくことわりを会得し理解することをいう。ここでは、帰着することをいう。

従って一句は、『法華経』前半の迹門では、人はすべてそのまま一仏乗の教えに救い摂られて仏となる可能性があるとす。従って、声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えは一仏乗に含め収められるから、三乗は一仏乗と同体であり、『法華経』後半の本門では、一仏乗の久遠実成の本仏積尊も、本仏が応身のかたちで娑婆世界に迹を垂れた現前の積尊も同体であるとする。このように権と実、迹と本とが融合して、空・仮・中の三諦が相互に融け合って円融した真実の道に帰着する。これを、ハスの花が開いてハスの果実である蓮子が現われる、蓮の華に譬えるのである、の意をいう。

参考——「円融三諦・三諦円融」について

空・仮・中の三観のなかの一つ、空観は、現象世界を否定的に扱って一切を空と観察することをいい、仮観は、現象世界を肯定的にとらえて仮と観察することをいい、中観は、空と仮の両者が共に具わって初めて真理を体得し得ると捉えて、一思いに一時に、空も仮も一であると観察することをいう。

「円融三諦・三諦円融」は、空・仮・中の三諦が互いに融け合い、同一時に成立し空・仮・中の三諦のおのおが他の二諦を含めることをいう。

すなわち空・仮・中の三諦は、前の空諦と仮諦との二諦が現象面に ついて、中諦は本体面から、それぞれ独立して真理と考えるのが 隔歴三諦であるが、円融三諦は、この隔歴三諦に対して、空・仮・中それぞれの一諦のうち三諦を具えて区別なく、三者相互に融け 合っていることをいう。

円融は、隔歴がそれぞれのもので互いに隔てがあつて、別々である ことをいうのに対して、それぞれのもので、その立場を保ちながら完 全に一体となつて、互いに融け合い、妨げのないこと、つまり相即相 入をいう。

この三諦の真理を観法によつて体得するのが三観で、今もち合わせ ているこの心がそのまま円融三諦であるという。だから円教でいう 「中」は当然、空・仮・中の三つを含んでいる。すなわち空・仮・中 の三諦に関して、その本体は唯一であつて、互いに他を具えて円満 し、空諦そのままが仮諦・中諦であり、仮諦そのままが空諦・中諦で あり、中諦そのままが空諦・仮諦であると説く。

なお、円融三観は、一心三観ともいい、一念の心がすなわち円融三 諦であると観じる、すべての事象や存在がそのまま相対的思惟を超え た絶対的な理法にかなうことを体得することをいう。

(14) 声、仏事をなす、これを称して経となす』『妙法蓮華経』の経題 の「経」は、「声、仏事をなす」ことをいう。

「声」は金口をいう。金口は金色の口の意で、仏の口をいう。転じて 釈尊の説法をいう。

「仏事」は、仏になつた悟りの上での仕事、仏がなすべき仕事、す なわち、仏の教化、衆生を救う事業活動、所作、衆生済度をいう。

「声、仏事をなす」は、娑婆世界においては、声が仏がなすべき仕 事であり、衆生救済の活動をなすことをいう。つまり、衆生救済のた めに仏の説法があるが、この説法が仏の声によつてなされるものが仏 がなすべき仕事であることをいう。

「経」は、仏の金口で説かれた教えを、釈尊教化教導の四十九年間 に聞いたまま結集し、総称したものをいう。

従つて一句は、肉身の仏釈尊の金口のはたらきは、説法である。声 による説法によつて衆生教化をするということ、これを結集し、総称 して経とするのである、の意をいう。

参考——「音声、仏事をなす」について

「音声」は、音や騒音や声や発音されたことばをいう。

「仏事」は、仏がなすべき仕事、すなわち仏が衆生を救い、教化教 導する事業活動をいう。

仏教では、香りや光などがコミュニケーションの手段である世界も 想定されているが、娑婆世界では、声が説法の有効な手段であるとさ れる。衆生救済のために仏の説法があるが、この説法が声によつてな されることを、「音声、仏事をなす」はいう。つまり、娑婆世界にお いては、仏がなすべき仕事は他の方法によらず、ただ音声によつて説 法することにあり、衆生救済の活動をなすので、これを「音声仏事」 ともいう。

音声仏事については、『摩訶止観』巻第七下に、「もし耳のなかより 大（白牛）車を得るは、多く音声を用いて仏事をなす。鼻のなかには 香を用い、舌のなかには味を用い、身のなかには天衣を用い、意の

なかには寂滅を用い、一根の仏事は互いに諸根に通ず(『大正蔵』四六・一〇一b)とあり、法雲の『法華義記』巻第八に、「かつ、娑婆世界は多く音声をもって仏事となす。この故に觀世音に從つて名を受ける」(『大正蔵』三三・六七八a)とあり、吉蔵の『法華玄論』巻第十に、「三には、娑婆は音声をもって仏事をなす」(『大正蔵』三四・四四九a)とある。

これらの経論書に先立つ『維摩經』卷下(『大正蔵』一・五五三c—五五四a)には、もろもろの仏国土における仏の仕事について、阿難の「未曾有なり。世尊よ。かくのごとき香飯かうはんのよく仏事をなすことよ」ということばに応えて、仏が次のように説く。

「かくのごとし。かくのごとし。阿難よ、あるいは仏土にして、仏の光明をもって仏事をなすあり。諸菩薩をもって仏事をなすあり。仏の化すところの人をもって仏事をなすあり。菩提樹をもって仏事をなすあり。仏の衣服・臥具をもって仏事をなすあり。飯食をもって仏事をなすあり。園林・台觀たいくわんをもって仏事をなすあり。三十二相・八十随形ずいけい好こうをもって仏事をなすあり。仏身をもって仏事をなすあり。虚空をもって仏事をなすあり。衆生は、まさにこの縁をもって律行に入るを得べし。夢・幻・影・響・鏡中の像・水中の月・熱時の炎かぜ、かくのごときなどの喩うゑをもって仏事をなすあり。音声・語言・文字をもって仏事をなすあり。あるいは清浄な仏土の寂寞じやくぼくなるあり。無言・無説・無示・無識・無作・無為にしてしかも仏事をなす。かくのごとし、阿難よ、諸仏の威儀・進止あり。もろもろの施せ為ゐするところ、仏事にあらざるなし。阿難よ、この四魔・八万四千の諸煩惱門ありて、諸衆生はこれのために疲勞す。諸仏はすなわちこの法をもって仏事をなす。これを『一切諸仏法の門に入る』と名づく」とある。

『維摩經』菩薩行品第十一からは、舞台が維摩の方丈から毘耶離城びやりの菴羅樹園あんらじゆゑんに戻る。維摩は、文殊とともに菴羅樹園の仏のもとに至る。仏は、維摩の方丈における衆生済度の営みがすべて真実であることを証明し、一切の事物が悉く衆生を利益する仏事であると説く。

仏の光明も、諸菩薩も、仏の化すところの人も、菩提樹も、仏の衣服・臥具も飯食も、園林・台觀も、三十二相・八十随形好も、仏身も、虚空も、夢・幻・影・響・鏡中の像・水中の月・熱時の炎かぜ、かくのごときなどの喩えも、音声や語言や文字も、清浄な仏土の寂寞も、無言・無説・無示・無識・無作・無為も、諸仏の威儀・進止・施為も、ましてや、煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天魔の四魔・八万四千の諸煩惱門も、すべてが仏事であると説いている。つまり、順境は勿論、逆境にあつても、順境に変えるのが仏の仕事である。

僧肇の『注維摩經』卷九で、鳩摩羅什は仏事について、次のように説いている。「仏事に三種あり。一には善をもつてす。光明・神力・説法などこれなり。二には無記。虚空これなり。三には不善をもつてす。八万四千の煩惱これなり。譬えば、薬師のあるいは良薬をもつて、あるいは毒薬をもつて人の病を治するがごとし。仏もまたかくのごとし。煩惱をもつてするは仏の愛をもつて難陀を度し、瞋恚して悪竜を化したもう」(『大正蔵』三八・四〇四c)とある。

香飯はたんなる飯ではない。宇宙に存在するありとあらゆるものは香飯でないものはない。一切は仏であり、一切は仏事である。

仏の光明や、諸の菩薩や、仏が作った人や、仏の勝れた特相である三十二相や八十種の容姿や、仏身や、清浄な仏土の寂寞や、諸仏の威儀・進止・施為は、一の善である。

菩提樹や、仏の衣服・臥具や、飯食や、樹園・森林・物見台や、虚

空や、夢・幻・影・響・鏡中の像・水中の月・熱時の炎かすろなどの喩えや、音声・語言・文字や、無言・無説・無示・無識・無作・無為かすろは、二の無記である。

そして、煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天魔の四魔や八万四千を数える煩惱門は、三の不善である。

つまり、善も不善も無記も、あらゆる一切が仏事であり、仏事でないものはない。仏はあらゆることを自在に駆使して、衆生を教化教導するのである。仏事は、これをいう。

仏事は、娑婆世界のあるゆることをいうが、『注維摩經』卷第九には、「あるものは音声、語言、文字をもって仏事をなす。肇じょういわく、すなわちこの娑婆国の仏事なり」(『大正藏』三八・四〇四b)とある。

つまり、僧肇そうじょうが、『維摩經』に「音声・語言・文字をもって仏事とせず」とある文を、音声・語言・文字は、現在を生きるわたしたちの娑婆世界における仏事であると解釈したことや、『摩訶止観』卷第七下の「もし耳みみのなかより大(白牛)車だいにしやを得るは、多く音声を用いて仏事をなす」(『大正藏』四六・一〇一b)や、『法華義記』卷第八の「かつ、娑婆世界は多く音声をもって仏事となす」(『大正藏』三三・六七八a)や、『法華玄論』卷第十の「三には、娑婆は音声をもって仏事をなす」(『大正藏』三四・四四九a)とある趣意が、この私序王に援用されているものと思われる。

娑婆世界のあるゆることを仏事というに関連して、道元禪師は、(一)自受用三昧じじうじゆうさんまいに坐禅ある(このとき、十方法界の土地、草木、牆壁かべ・瓦礫がら、みな仏事をなすをもってその起こすことろの風水の利益に預るともがら、みな甚妙不可思議の仏化に冥資めいしされて、近き悟り

を顕わす。(中略) 広大の仏事、甚深微妙の仏化をなす。この化道の及ぶところの草木・土地、ともに大光明を放ち、深妙法を説くこと、窮きゆうまるときなし」(『正法眼藏』辨道話(『道元禪師全集』第二卷・五三九)とある。凡夫の目で見れば単なる自然界も、仏の目から観れば一大仏界となる。

蘇東坡の句に、「溪声便是広長舌、山色豈非清淨身」とある。溪声はすなわちこれ広長舌、山色さんしきあに清淨身にあらざらんやという句である。谷川のせせらぎは法身仏の説法であり、山の色は清淨仏身に他ならないという。つまり、声を聞いて道を悟り、色を見て心を明かす一大仏界を詠じている。

さらに、「溪声山色」は、谷川の水の流れる音や山のはだの意をいう。このような自然現象も修行者に取っては、ブツダの妙なる説法の声であり、またブツダの生きたすがたであることをいう。衆生が仏心を感じ、仏力がこれに應じるのを感じといい、感と応とが行き交わることを道交みちまわというが、衆生の感と如来の応とが互いにあい通じあい交わる、感応道交かんとうどうまわが、「音声、仏事をなす」には存在する。

なお「仏事」は、仏の徳を発揚することをいう。立地たつちともいう。禅宗では、事に托して仏法を開き示すことをいい、開眼や、仏像を堂内に安置する安座や、香をつまんで香炉で燃やす拈香ねんかうなどという。

(15) 円詮の初め、これを目して序となす「円詮」の円は、円教をいう。円教は、(三)藏教・通教・別教・円教の化法えんぜんの四教の円教であり、片寄りがなく、円まどかで、完全な形の教えをいう。

『法華経』が説かれる以前の釈尊の教えは、生けるものを、迷いの地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道から救い摂とって、声聞の境地に生かすものであり、声聞は縁覚の境地に生かすものであり、縁

覺は菩薩の境地に生かすものであった。つまり爾前の諸經は、六道に呻吟する生けるものを三乗に至らせる方便の教えであった。

方便の教えには、方便の権はあるが、真実の実に欠ける。方便の教えには、肉身の近仏積尊の教えはあるが、久遠実成の遠仏積尊の教えに欠ける。

「円」は、図形の円が示すように片寄りがなく、円<sup>ま</sup>かで、完全な有り様をいう。従って教えには、方便の権だけでなく、真実の實<sup>まこと</sup>が具わり、迹門の迹だけでなく、本門の本<sup>ほん</sup>があい具わって完全な円になるといえる。

円の教えは、華嚴・方等・般若の教説にも表わされているが、それはまだ権を開いて実を顕わしていない未開頭の円であり、迹を開いて本を顕わしていない未開頭の円であって、円だけの純粹の円の教えではない。純粹の円の教えの円教は、専ら方便を開いて真実を顕わした法華の教説にしかない。未開頭の円の教えを「昔<sup>しやく</sup>円」というのに対して、開頭した法華の円の教えを、「今<sup>こん</sup>円」という。

今円の教えは、独り『法華經』だけである。円は、独り『法華經』をいう。

「詮」は、意味を表示するという詮表、言い表わすの詮頭と同義であり、説き明かすことをいう。

説き明かす詮ほど大切なものはない。どれほど勝れた教えであつても、生けるものに説き明かし、説き示されて初めて、悩める衆生を救済する力となつて、生きるものになる。ここでは円詮は、『法華經』を完全に説き明かし表現することをいう。

「目す」は、みる、見合<sup>あ</sup>わす、見分ける、目をつける、目で合図する、小分けするなどの意がある。ここでは、名づけるの意と取る。

「序」は、序文、序言で、經典が説かれるいわれやゆかりを意味する。

ここでは、『法華經』の序品が、誰にも分らないところから教え始め、秘密の教義を初めて開示していく、完全な説法の最初をいう。

従って一句は、方便の権と真実の實と、迹門の迹と本門の本とが片寄ることなく、完全な形で具わり、純粹に円かな円教である『法華經』が説かれた、いわれやゆかりを説き明かす最初の章を名づけて、序品とする、の意をいう。

(16) 序類あい従う、これを称して品となす「序類あい従う」は、序および序と同類のものが一緒にまとまっていること、つまり、円教の精髓の要点をまとめた序と、円教そのものを詳述する本文とが一緒にまとめられていることをいう。

「序」は序言、經典が説かれたいわれやゆかりをいう。「序は述なり」と、述べ顕わすことなり」という。

序品は、一つの經のうちで、序となる部分をいう。ここでは、『法華經』二十八品のうちの第一の品をいう。

「類」は、似た仲間をいう。つまりここでは、『法華經』の第二から第二十八までの二十七品の本文をいう。

従つて序類で、『法華經』の全二十八品をいう。

「相従」は一般には、一緒についていくことをいう。ここでは、一緒にまとまっていることの意から、序品も序品に続く本文の二十七品も同じ種類のものであること、つまり、完全に純粹な円教を説き明かしていることをいう。

「品」は、一般的に、ある部類に属するもの、同じ種類のもの一般、同類のものを集めたものをいう。『法華文句』卷第一上には、「品

とは、義類同じきもの、一段に聚まるが故に、品と名づくるなり」(『大正蔵』三四・一b)とある。つまり書物のなかの一節、文章を区切って分けた編や章をいう。品の数を品数、品につけた題名を、経題に対して品題という。

従って一句は、『法華経』の序の章も、この序章に続く二十七の章も、完全に純粹な円教を説き明かしており、それぞれ二十八の章を品と呼ぶ、の意をいう。

(17) 衆次の首めを、名づけて第一となす。衆次の衆は、多い、諸々の意をいい、次は順序、位置をいうから、衆次は多くのものの順序の意をいう。ここでは、衆品の次第、つまり、『法華経』二十八品の順序をいう。

「首め」は、始め、第一をいい、最初の部分を意味する。

「第一」は『法華経』二十八品の最初をいう。最も重要、最上位、最高級をいう。序品は、『法華経』二十八品のなかの最初の章をいう。

従って一句は、序品は、『法華経』二十八品全体の精髓を要約しており、二十八品の最初に位置づけられているから、第一というのである、の意をいう。

(18) 釈していわく、談記(託)はこれ名を叙ぶ。会冥はこれ体を叙ぶ。円珠はこれ宗を叙ぶ。俱寂はこれ用を叙ぶ。四華六動はこれ教を叙ぶ。本迹、知んぬべし。

(1) 「釈」は、経論の教義や意味を解釈し、説明し、註釈することという。ここでは、この私序王で、ここまで天台智顛の本意を、

『法華経』の経文に即して解釈してきたことをいう。

「いわく」は、いうことにはをいう。ここでは、「釈して」の智

顛の本意を、『法華経』の経文に即した解釈から分かることをいえばの意をいう。

「釈していわく」は、これまでとこれからとを繋いだ、前後のわたりをいう。

つまり、これまで私章安が、天台大師智顛の本意を、『法華経』に即して解釈してきたことから分かったことは、『法華経』の一つ一つの経文の解釈を基に、『法華経』一経の肝心要の精髓を、題名と、本質と、目的と、はたらきと、仏教全体に占める位置を含む『法華経』の教えをいう、「名」「体」「宗」「用」「教」という、五つの面から論証することができることである。名・体・宗・用・教は、本論に入って詳述することになる五重玄義に他ならない、の意をいう。

なお、五重玄義の「名」は名称をいい、『妙法蓮華経』という経の題名を解釈することを、「釈名」という。

「体」は本質をいい、『妙法蓮華経』一経を貫く本質を追究することを、「頭体・弁体」という。

「宗」は目的をいい、『妙法蓮華経』の主要な目的を論証することを、「明宗」という。

「用」ははたらきをいい、『妙法蓮華経』のはたらきを論究することを、「論用」という。

「教」は仏教全体の組織をいい、仏教全体のなかで、『妙法蓮華経』が占める地位を定めることを、「判教・教相・判教相」という。

詳細は、本研究の冒頭の『法華玄義』の四と五と六の三項目を参照されたい。

(2) 「談記」は、既出の文中に、「寄円珠而談理。(中略) 託宝所而論極」の文、「円珠に寄せてしかも理を談ず。(中略) 宝所に託してしかも極を論ず」を指す。

談記を『釈籤』は譚記といい、譚託の誤りであろうといい、『国訳一切経』も誤りであろうとする。『釈籤』は記は託の誤りという。ここでは、「談記」は、「談託」の誤記であると取り、談記(託)と表記した。

「円珠に寄せてしかも理を談ず」は、『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる、衣裏繫珠の譬喩に基づく。衣の裏に縫いつけられた値段がつけられないほど貴重な宝石である、無価の宝珠にと寄せて、『法華経』が目的とする、一仏乗のような究極の真実の道理の意を暗喩する。

「宝所に託してしかも極を論ず」は、『法華経』化城喩品第七に説かれる、化城宝処の譬喩に基づく。遠いは、真実の涅槃を指す五百由旬の宝所にこと寄せ、近いは、二乗の涅槃を指す三百由旬のところへ化作された化城宝所にこと寄せて、究極のことわりを論じている。

つまり「談記(託)」は、無価の宝珠と宝処に託して、三乗から一仏乗への道筋をつけ、一仏乗という究極のことわりや目的を標榜することをいう。

「名」は、名称、『妙法蓮華経』という経題の名称をいう。

(3) 「会冥」は、同じく「極会円冥・極会し円冥すれば」という文を指し、五百由旬先の宝所が象徴する一仏乗という、『法華経』の最終的な修行目的を達成し、『法華経』によって偏と円、迹と本、権と実のような相対的なものが同化し、融合し、一仏乗に帰

着することをいう。つまり会冥は、『法華経』一經に一貫して流れる、一切は円融して、あるがままにあることという諸法実相という、根本精神である經体を体得して直觀的に觀ることをいう。

「体」は、本質、『妙法蓮華経』一經を貫く本質をいう。

(4) 「円珠」は、完全な宝珠をいう。『法華経』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠の譬喩に基づく、衣の裏に縫いつけられた値段がつけられないほど貴重な宝石である、無価の宝珠を指す。無価の宝珠は、『法華経』が目的とする、『妙法蓮華経』が『法華経』以前の教えと『法華経』自身の教えとを収斂した、仏自行の因果であり、究極の一仏乗の因果という、『法華経』一經を貫く最も肝要な原理である目的を意味している。

「宗」は、目的、『妙法蓮華経』の主要な目的をいう。

(5) 「俱寂」は、本文の「事理俱寂・事理俱に寂なり」を指す。事、すなわち『法華経』が説く修行実践によって到り着く目的地も、理、すなわち『法華経』が説き示す究極の真実もともに、あるがままに現われることになることをいう。

「用」は、はたらき、『妙法蓮華経』のはたらきをいう。ここでは、『妙法蓮華経』が説く、すべてはあるがままに現前しているということ、生けるものに断疑生信させる、勝れたはたらきをいう。

(6) 「四華六動」は、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華という四種の花が天から降り注ぎ、大地が東西南北および上下の六種に震動することをいう。四華六動は、『法華経』の説法が始まることを暗示する奇瑞である。

従って、『法華経』の説法が始まることによって、これまで説

かれることがなく、秘匿されていた一仏乗の教えを説き明かすとともに、『法華経』が声聞・縁覚・菩薩などに、それぞれの教えが完結しているとして、そのなかに安住し、三乗が一仏乗に帰着することに無知な現実に警鐘を鳴らし、一切を包摂する一仏乗という真実の有りに、無知な三乗人の目を覚醒させようとすることをいう。

「教」は、一般的に仏教全体の組織、『妙法蓮華経』が仏教全体のなかに占める地位を定めることをいう。ここでは、『法華経』の説法が始まることによって、これまでで説かれることのなかった一仏乗の教えを説き明かすとともに、『妙法蓮華経』が一仏乗の開顕によって、声聞・縁覚・菩薩という惰眠を貪る三乗人を覚醒させ、覚醒した三乗人が、自分たちを覚醒させた『法華経』が、仏教全体のなかでどのような地位を占めるかを明かすことをいう。

(7) 「本迹」の本は、真の仏は久遠の昔に成道したとする、根源の遠仏、すなわち本仏の本地をいい、迹は、近くこの世に形を顕わした近仏積尊は、その根源仏が衆生を教化教導するため本地より迹を垂れたとする、生けるものの宗教的な素質や能力や性質に応じて現われた垂迹の身である、応迹をいい、迹門をいう。

(8) 「私序王」の末尾の「本迹可知」は、本迹知るべしと訓めるが、ここでは、私序王全体の総括として、「本迹、知んぬべし」と訓む。一句は、天台大師智顛が世間に知ってほしいことは、「本迹」の一点にあることを強調した、「私序王」全体のまとめとなつていと取る。

従つて一句は、これまで私章安が、天台大師智顛の本意を、『法華経』に即して解釈してきたことから分かったことは、『法華経』の一つ一つの経文の解釈を基に、『法華経』一經の肝心要の精髓を、題名と、本質と、目的と、はたらきと、仏教全体に占める位置を含む『法華経』の教えをいう、「名」「体」「宗」「用」「教」という五つの面から論証することができるということである。名・体・宗・用・教は、本論に入つて詳述することになる五重玄義に他ならない。

私章安のこの「私序王」のは、第一に、「談記(託)」で始まる。

無価の宝珠にこと寄せて、『法華経』が目的とし、一仏乗のような究極の真実の道理を説くという「円珠に寄せてしかも理を談ず」を指す「談」と、三百由旬に化作された化城宝所にこと寄せて、五百由旬の宝所という究極のことわりを論じる「宝所に託してしかも極を論ず」を指す「記(託)」との二つで、無価の宝珠と宝処とに託して、三乗から一仏乗への道筋をつけ、一仏乗という究極のことわりや目的を暗喩している。

この「談記(託)」は、「名」、すなわち『妙法蓮華経』という題名の含意、すなわち三乗から一仏乗への道筋をつけ、一仏乗という、一切を肯定の世界と捉える究極のことわりと目的を標榜している。

第二は、「会冥」である。

会冥は、「極会し円冥すれば」を指す。五百由旬先の宝所が象徴する、一仏乗という『法華経』の最終的な修行目的を達成し、『法華経』によつて偏りと円か、迹門と本門、方便と真実のよう



な相対的なものが融合し、三乗は一仏乘に帰着することを明かすが、真意は、このことを通して、一切は円融しており、あるがままにある諸法実相をいう。

この「会冥」は、「体」、すなわち『妙法蓮華経』一経を貫く一仏乘の開顯を通して、諸法実相という不二中道の本質を明かしている。

第三は、「円珠」である。

衣の裏に縫いつけられた無価の宝珠という、完全無欠の円かにあるのが「円珠」である。

この「円珠」は、「宗」、すなわち『妙法蓮華経』が、『法華経』以前の教えと『法華経』それ自身の教えとを収斂した、仏自行の因果であり、究極の一仏乘の因果が『法華経』一経を貫く、最も肝要な目的であることを述べている。

第四は、「俱寂」である。

『法華経』が説く修行実践によって到り着く目的地という事も、『法華経』が説き示す究極の真実をいう理もともに、不二中道として、すべてはあるがままに現われていることを、「事理俱に寂なり」という。

この「俱寂」は、「用」、すなわち『妙法蓮華経』が説く、不二中道として、すべてはあるがままに現前している肯定の世界を、生けるものに断疑生信させる、勝れたはたらきをいう。

第五は、最後の、「四華六動」である。

曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華が天から降り注ぎ、大地が東西南北および上下の六種に震動することを、「四華六動」という。四華六動は、『法華経』の説法が始まること

を暗示する奇瑞である。

この「四華六動」は、「教」、すなわち『法華経』の説法が始まることによって、これまで説かれることがなく、秘匿されてきた一仏乘の教えを説き明かすとともに『妙法蓮華経』が、一仏乘の開顯によって、声聞・縁覚・菩薩という惰眠を貪る三乗人を覚醒させ、覚醒した三乗人が、自分たちを覚醒させた『法華経』が、仏教全体のなかでどのような地位を占めるかを明かしている。

要するに天台大師智顛が、この『法華玄義』で明かそうとした本意は、『妙法蓮華経』の一仏乘にある。一仏乘は、本と迹とから成る。第十四品までの迹門の教えは、迹門の近仏積尊の教えだけに止まるものではない。迹門の教えがあつて初めて、本門の教えが開き顕らかにされる。第十五品以降の本門の遠仏積尊の教えがあつて初めて迹門説法の意図と使命が明らかになる。

本門があつて迹門があり、迹門があつて本門がある。本門は、本門の本質を失うことなく、迹門は、迹門の本質を失うことなく、しかも本門と迹門とは、それぞれを生かしながら融け合い、不二で相即相入の関係にある。

不二であり、相即相入の関係にあるのは円であり、妙である。円であり、妙である教えは、『妙法蓮華経』を描いて他にはない。『妙法蓮華経』が説く円であり、妙であるのは空と仮との両方を生かす中に他ならない。空であり、仮でありながら、空・仮の両方を包摂する中、空・仮・中が円融するのは、諸法実相に他ならない。

偏りも円かも、方便も真実も、三乗も一仏乘も諸法実相にあるから、すべては円に撰まり、妙に撰まり、中に撰まる。すべては

あるがままにあり、欠けるところがない。蓮華を譬喩として妙法の一仏乗を標榜する、『妙法蓮華經』という経題の「名」から観ても、諸法実相を説き明かそうとする、『妙法蓮華經』の本質の「体」から観ても、仏自行の因果という、『妙法蓮華經』の目的の「宗」から観ても、断疑生信を起こさせる、『妙法蓮華經』のはたらきの「用」から観ても、仏教全体の位置づけを含む、『妙法蓮華經』の説法自体の「教」から観ても、『妙法蓮華經』は、一仏乗の本門と迹門とを抜きにしては成り立たない。

天台大師智顛の本意は、純粹の円教である今円の一仏乗を説く、『妙法蓮華經』の核心は、名称の「名」・本質の「体」・目的の「宗」・はたらきの「用」・教えと仏教全体における位置づけの「教」という五重文義から観て、まさに、本門と迹門にある。

しかも、『妙法蓮華經』の核心である本門と迹門とは、本をみて本にとらわれずただ本、迹をみて迹にとらわれずただ迹という、ピチピチと生きて動く地上の世界が、湛然がいう「不二而二・二而不二」の、本迹ぐるみの不二中道の諸法実相にある。

このような広大無辺の肯定の世界が、『妙法蓮華經』の世界に他ならないと読み解くことによつて、『妙法蓮華經』全二十八品が首尾一貫した壮大な大系となることを知らなければならぬ、の意をいう。

### 〔現代語訳〕

一体、三乗を開き顕わした一仏乗のような、『法華經』が述べようとする究極の眞実の道理というものは、片寄った偏、つまり『法

華經』以外の經典と、完全無欠な円、つまり『法華經』との間に介在する乖離かひりや断絶を超越し、『法華經』が、『法華經』以外の經典と『法華經』とを繋ぐ、三乗から一仏乗への道筋をつけている。このことは、『法華經』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠えりけいじゆの譬喩に基づいた、衣の裏に縫いつけられた値段がつけられないほど貴重な宝石である、無価の宝珠にこと寄せて、『法華經』が目的とする、一仏乗のような究極の眞実の道理を説明することができる。

『法華經』が説く修行実践によつて到達しなければならない一仏乗のような究極の目的地は、遠いとか近いとかという距離によつて示されるものではない。しかしこのことを、『法華經』化城喩品第七に説かれる化城宝処の譬喩に基づいて、遠いは眞実の涅槃を指す五百由旬の宝所にこと寄せ、近いは二乗の涅槃を指す三百由旬のところに化作された化城宝所にこと寄せて、究極のことわりを論じるのである。

そのようにして、五百由旬先の宝所が象徴する一仏乗という、『法華經』の最終的な修行目的を達成し、『法華經』によつて偏と円、迹と本、権と実のような相対的なものが同化し、融合し、一仏乗に帰着すれば、『法華經』が説く修行実践によつて到り着く目的地も、『法華經』が説き示す究極の眞実もあるがままに現われることになる。

そうではあるけれども、一仏乗に入ることができないのは、真実は、『法華經』五百弟子受記品第八に説かれる衣裏繫珠えいりけいじゆの譬喩が教えるように、無明の酒に酔い痴しれて、己れの本性を狂くるわせた人が、親友が縫いつけてくれた衣の裏の無価の宝珠に気づかなかつたように、一仏乗という涅槃の道に迷っていることにあるのである。

誰もが成仏することができる一仏乗への道は、踏み間違えなければ、衣裏宝珠の喩えが教えるように、実際は目の前の身近にあつて、遠くに求める必要がないが、無明の酒を呑み無明の酒に酔い潰つぶれて、一仏乗への道を踏み間違えるから、化城喩品が教えるように、これ以上先に行けないといい、その道程は長く果てしないというのである。

諸聖人の主であり、世にも尊い尊敬されるべき人積尊は、世の人々が、これかあれかにとられる相対的な分別を超越し離脱することができずにおり、執著に執著を重ねていることを憐れに思い、天から曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華という四種の花を降らせ、大地を東西南北と上下の六種に震動させた。

そして、それまで声聞や縁覚は勿論、世の人々が正しい究極の教えとばかり思つて信じていた『法華經』以前の三乗の教えを、実は一仏乗に到らせる方便の教えであつたと開き明かした。

そしてさらに、『法華經』見宝塔品第十一にあるように、釈迦牟

尼仏が十方から来集した分身の諸仏を容れるために、この娑婆世界を変えて清浄とし、さらに二度にわたつて八方の二百萬億那由他の国土を変えて清浄の国土とし、『法華經』從地涌出品第十五にあるように、『法華經』を説く菩薩を無量千萬億も地中より湧き出させて一仏乗を受持し供養させ、究極の一仏乗を明瞭に表に顕あらわわした。

こうして、法華会中の三乗・四衆・天竜八部衆などの聞もん法者ぽうを始め、あまねく一切の生けるものに、四華六動や三變千踊などの奇瑞を実際に見せたり、説法を聞かせたりして、信仰を確かなものとすると同時に、真実の一仏乗に導き入れたのである。

『法華經』によれば、声聞・縁覚の二乗人は勿論、菩薩も、生ける衆生はことごとくそのまま仏に救い取られる存在である。生けるものすべてが仏になるために、『法華經』以前の諸經は、生けるものすべての宗教的な素質や能力や性質に応じて声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えを説いたのであつて、生けるものすべてが仏となることができるとする一仏乗の教えに至る方便が、声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えであるに過ぎないとする。このような、だれもが仏になることができるとする一仏乗という深遠な教えの蔵を、『法華經』が初めて開けたことが、超えて勝れた不可思議である。この超えて勝れた不可思議を「妙」という。

智顛は、智顛以前の、特に吉蔵などが説く従前の、人は声聞から

縁覚へ、縁覚から菩薩へ、菩薩から仏へという、三乗の一つひとつの境地を順序に完成して一仏乘に至るとする在り方は間違ってお  
り、真実は、声聞は声聞のまま、縁覚は縁覚のまま、菩薩は菩薩の  
まま、つまり、三乗のまま一仏乘に至るとするのが正しい意味と道  
筋であるとする。正しい一仏乘への道を示すから、「法」と名づけ  
る。法は存在するすべてが真実にある、あるがままの真実のすがた  
をいう「諸法実相」を本体とする。

仏は、近くすがた形を顕わした肉身の積尊が終極ではない。肉身  
の積尊の本仏は、菩薩として誓願を成就して久遠の昔に成仏してい  
る。本仏となる直接的な原因である一切の修行のなかで、一切はみ  
な空と観、諸法実相を明らかに観る観照般若の智慧という果報、す  
なわち「真性」「観照」「資成」という本仏の果報を得ている。この  
仏の本果を明かすのを、ハスの果実である蓮子に喩えるのである。

『法華経』前半の迹門では、人はすべてそのまま一仏乘の教えに  
救い摂られて仏となる可能性があるとする。従って、声聞・縁覚・  
菩薩の三乗の教えは、一仏乘に含め取められるから、三乗は一仏乘  
と団体であり、『法華経』後半の本門では、一仏乘の久遠実成の本  
仏積尊も、本仏が応身のかたちで娑婆世界に迹を垂れた現前の積尊  
も団体であるとする。このように権と実、迹と本とが融合して、  
空・仮・中の三諦が相互に融け合って円融した真実の道に帰着す

る。これを、ハスの花が開いてハスの果実である蓮子が現われる、  
蓮の華に譬えるのである。

肉身の仏積尊の金口のはたらきは、説法である。声による説法に  
よって衆生教化をするということ、これを結集し、総称して経とす  
るのである。

方便の権と真実の實と、迹門の迹と本門の本とが片寄ることな  
く、完全な形で具わり、純粹に円かな円教である『法華経』が説か  
れた、いわれやゆかりを説き明かす最初の章を名づけて、序品とす  
る。

『法華経』の序の章も、この序章に続く二十七の章も、完全で純  
粋な円教を説き明かしており、それぞれ二十八の章を品と呼ぶ。

序品は、『法華経』二十八品全体の精髓を要約しており、二十八  
品の最初に位置づけられているから、第一というのである。

これまで私章安が、天台大師智顛の本意を、『法華経』に即して  
解釈してきたことから分かったことは、『法華経』の一つ一つの経  
文の解釈を基に、『法華経』一経の肝心要の精髓を、題名と、本質  
と、目的と、はたらきと、仏教全体に占める位置を含む『法華経』  
の教えをいう、「名」「体」「宗」「用」「教」という、五つの面から  
論証することができるということである。名・体・宗・用・教は、  
本論に入って詳述することになる五重玄義に他ならない。

私章安のこの「私序王」は、第一に、「談記(託)」で始まる。

無価の宝珠にこと寄せて、『法華経』が目的とし、一仏乗のような究極の真実の道理を説くという「円珠に寄せてしかも理を談ず」を指す「談」と、三百由旬に化作された化城宝所にこと寄せて、五百由旬の宝所という究極のことわりを論じる「宝所に託してしかも極を論ず」を指す「記(託)」との二つで、無価の宝珠と宝処に託して、三乗から一仏乗への道筋をつけ、一仏乗という究極のことわりや目的を暗喩している。

第一の「談記(託)」は、「名」、すなわち『妙法蓮華経』という題名の含意、すなわち三乗から一仏乗への道筋をつけ、一仏乗という、一切を肯定の世界と捉える究極のことわりと目的を標榜している。

第二は、「会冥」である。

会冥は、「極会し円冥すれば」を指す。五百由旬先の宝所が象徴する、一仏乗という『法華経』の最終的な修行目的を達成し、『法華経』によって偏りと円か、迹門と本門、方便と真実のような相対的なものが融合し、三乗は一仏乗に帰着することを明かすが、真意は、このことを通して、一切は円融しており、あるがままにある諸法実相をいう。

この「会冥」は、「体」、すなわち『妙法蓮華経』一経を貫く一仏

乗の開顕を通して、諸法実相という不二中道の本質を明かしている。

第三は、「円珠」である。

衣の裏に縫いつけられた無価の宝珠という、完全無欠の円かにあるのが「円珠」である。

この「円珠」は、「宗」、すなわち『妙法蓮華経』が、『法華経』以前の教えと『法華経』それ自身の教えとを収斂した、仏自行の因果であり、究極の一仏乗の因果が、『法華経』一経を貫く、最も肝要な目的であることを述べている。

第四は、「俱寂」である。

『法華経』が説く修行実践によって到り着く目的地をいう事も、『法華経』が説き示す究極の真実をいう理もともに、不二中道として、すべてはあるがままに現前している肯定の世界を、生けるものに断疑生信させる、勝れたはたらきをいう。

第五は、最後の、「四華六動」である。

曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華が天から降り注ぎ、大地が東西南北および上下の六種に震動することを、「四華

六動』はいう。四華六動は、『法華經』の説法が始まることを暗示する奇瑞である。

この「四華六動」は、「教」、すなわち『法華經』の説法が始まることによって、これまで説かれることがなく、秘匿ひそかくされてきた一仏乗の教えを説き明かすとともに、『妙法蓮華經』が、一仏乗の開顯によって、声聞・縁覚・菩薩という情眼を貪る三乗人を覚醒させ、覚醒した三乗人が、自分たちを覚醒させた『法華經』が、仏教全体のなかでどのような地位を占めるかを明かしている。

要するに天台大師智顛が、この『法華玄義』で明かそうとした本意は、『妙法蓮華經』の一仏乗にある。一仏乗は、本と迹とから成る。第十四品までの迹門の教えは、迹門の近仏積尊の教えだけに止まるものではない。迹門の教えがあつて初めて、本門の教えが開き顯らかにされる。第十五品以降の本門の遠仏積尊の教えがあつて初めて、迹門説法の意図と使命が明らかになる。

本門があつて迹門があり、迹門があつて本門がある。本門は、本門の本質を失うことなく、迹門は、迹門の本質を失うことなく、しかも本門と迹門とは、それぞれを生かしながら融け合い、不二で相即相入の関係にある。

不二であり、相即相入の関係にあるのは円であり、妙である。円であり、妙である教えは、『妙法蓮華經』を措いて他にはない。『妙

法蓮華經』が説く円であり、妙であるのは空と仮との両方を生かす中に他ならない。空であり、仮でありながら、空・仮の両方を包摂する中、空・仮・中が円融するのは、諸法実相に他ならない。

偏りも円かも、方便も真実も、三乗も一仏乗も諸法実相にあるから、すべては円に撰まり、妙に撰まり、中に撰まる。すべてはあるがままにあり、欠けるところがない。蓮華を譬喩として妙法の一仏乗を標榜する、『妙法蓮華經』という経題の「名」から観ても、諸法実相を説き明かそうとする、『妙法蓮華經』の本質の「体」から観ても、仏自行の因果という、『妙法蓮華經』の目的の「宗」から観ても、断疑生信を起こさせる、『妙法蓮華經』のはたらきの「用」から観ても、仏教全体の位置づけを含む、『妙法蓮華經』の説法自体の「教」から観ても、『妙法蓮華經』は、一仏乗の本門と迹門とを抜きにしては成り立たない。

天台大師智顛の本意は、純粹の円教である今円の一仏乗を説く、『妙法蓮華經』の核心は、名称の「名」・本質の「体」・目的の「宗」・はたらきの「用」・教えと仏教全体における位置づけの「教」という五重玄義から観て、まさに、本門と迹門にある。

しかも、『妙法蓮華經』の核心である本門と迹門とは、本をみて本にとらわれずただ本、迹をみて迹にとらわれずただ迹という、ピチピチと生きて動く地上の世界が、湛然がいう「不二而二・二而不

二」の、本迹ぐるみの不二中道の諸法実相にある。

このような廣大無辺の肯定の世界が、『妙法蓮華経』の世界に他ならないと読み解くことによって、『妙法蓮華経』全二十八品が首尾一貫した壮大な大系となることを知らなければならない。

